

※注意※

この作品は、拘束行為などの過激な陵辱シーンを含みます。  
自己責任でご覧ください。

※注意2※

無断で、当サークルの作品の一部または全部の複製や転載を  
することを禁止します。

この作品が、【moestian!!】以外の者からアップロードされて  
いた場合は、違法にアップロードされた可能性があります。  
発見した場合、以下サイト内メールフォームより通報して頂  
けると幸いです。

<http://moestian.web.fc2.com/denshi/denshi.html>

それを、土方は最初気にもとめていなかった。

混雑した電車の中では、ありふれたことだろう。太股のあたりに不規則に触れる掌に、密室に詰め込まれているという不快感を感じても、それ以上の感情は持ち合わせなかった。

しかし、その掌は土方の寛容な態度に気を良くしたのか、明らかに意図をもって臀部へと這い上がると、そこにピタリと張り付いて不時着した。

「……………」

ここに来て、土方には迷いがあった。年下の栗毛の部下のような美少年ならいざ知らず、真選組の鬼の副長と呼ばれる悪人面の自分に、そのような行為を試みる物好きがそうそういるとは思えなかったのだ。自分の風貌と肩書きを考えると、触られたなどと糾弾して、その結果勘違いだと判明したらこんなに恥ずかしいことはない。土方が躊躇していると、見えざる掌は大胆になり、贅肉などない引き締まった尻を、五指を大きく動かしながら揉みだしてきた。

(…ちよ、こいつ、冗談じゃねえぞ、気色悪ィ！)

骨ばって柔らかさの欠片もない自分だけれど、極々一部のある種の男にとって、この体がそういう対象になりうるということは知っていた。

これは疑う余地がないだろう。

土方が驚きから回復できないでいる間に、もはやその掌は卑猥な指使いを隠す気もないようで、双丘の縦筋の割れ目を、着流しごしにさわさわと上下になぞった。その感触のおぞましさに、土方の背筋に怒りを含んだ悪寒が走った。その手首を捻り上げて、あらん限りの怒声を叩きつけて、一刀のもとに斬り捨ててやろう、と、開ききった瞳孔に烈火のような殺意を燃えたぎらせた、その時――。

電車はトンネルに差ししかかった。車体を人工の闇が包みこみ、ガラスは車内の光を反射させ、やや暗い鏡となって室内の情景を写しこむ。

「……ッ！！」

敵を確かめようと、反射的にガラスに目を向けた勇敢で知性のある侍は、極限まで絞まった喉から声にならない悲鳴を上げた。

一瞬で、心臓が爆発寸前のエンジンのような轟音を鳴り響かせ、こめかみがドクドクと脈打って痛みすら引き起こした。

体中の汗腺から、ぶわーっと脂汗が噴き出る。

土方の視線の先には、冷やかさと嗜虐的な熱を混ぜ合わせた、危険な光を放つ石榴色の瞳が二つ。

ガラス越しに真っ直ぐ土方を見据えると、目をそらすことを許さない気迫で土方を捕らえ、口端をニッと上げて皮肉な笑みを浮か

べた。

「声を上げたきゃ、上げればいい」

耳元によせた唇が、息のような低い声で囁いた。

「…ンっ！」

土方は必死で声を嘯み殺した。死神の鎌の切っ先のように、男の指が尻穴に突き立てられたのだ。

「驚いちゃって、かぁわいい。けど、身に覚えがありませんって面じゃねえなあ」

「ひぁ…っ」

漏れそうになる声を、どうにかこうにか押しとどめる。土方の体を開発し、眠っていた性感をほじくり出した張本人たる指先が、恐怖で窄まった蕾を荒らし始めたのだ。

（あぁ…やめっ、こんなことではやめてくれ、銀時！）

土方は今にも潰れそうな胸の内でそう叫んだが、やめて欲しいと縫ったり、慈悲を求めて哀願する眼差し一つ、銀髪の男に向けられなかった。

——心当たりがありすぎるのだ。

殺気と呼んでも遜色ない、巨大な冰山に背後をとられているような冷気が、土方の背中に吹きつけてくる。布さら貫く気なのかと恐ろしくなるほど、後孔にあてがわれた指は乱暴に穴を突き立てたが、土方は歯を食いしばって声を上げぬよう耐えた。その苦悶する姿をしばし楽しむと、銀時は支配者の笑みを浮かべて指を離れた。無抵抗に隷従する態度に、銀時の嗜虐心が残酷な好奇心を駆り立てられたのだ。もっと、もっと。痛みよりも、嫌がるものを。耐えるに、しんどいものを…。銀時の指先は淫らに律動し、尻たぶを円を描くようにいやらしく撫でまわして、息を潜めて事態をやり過ごそうとしていた蕾を優しく揉み解しにかかった。

「…ん、…んんっ」

この仕打ちに、土方は焦りと絶望を感じた。ここまでやる気なのかと、慄然とした。痛みならまだ耐えられても、土方の弱点を地図がかけるほど正確に知り尽くしている男に性的に責められては、嘯み殺せなかった喘ぎが歯の隙間からどうしたって漏れてしまう。周囲をぎっしり他人に取り巻かれた異常な状況で。感じてはいけないと思えば思うほど、緊迫というナイフに剥き出しにされた神経が、快楽をダイレクトに拾ってしまう。耐え難い甘美な刺激が脊髄を駆け上がり、頭の芯をゾクゾクと痺れさせる。尻の筋肉にキュッと力を込め、秘奥を守るささやかな盾にしようと試みても、銀時の器用な指先に狭間を割り広げられ、あっさりと暴かれふにふにと揉まれてしまう。堅く閉じていたはずの入り口は、いまや蕩けて、土方の意志に反して強請るようにひくひくと収斂した。

銀時が、他人にばれてもいっこうにかまわない気でいるのは明らか

かだった。女が男に痴漢されたのなら、発覚した場合、不名誉と罪状と周囲の義憤は男の身に一身に降り注ぐ。それは疑いない。しかし、男が男に痴漢された場合はどうだろう。しかも自分は帯刀している侍であり、身分は真選組副長である。その上、意に反する屈辱的な仕打ちであっても、女と違って感じてしまったことを男は隠せない。土方の証は不本意ながら、着流しの布地を少し持ち上げてしまっている。これでは、好奇の目にさらされ、笑い物になるのは自分である。銀時とて同じように見られるだろうが、この男にその事態を恐れている様子は全くない。そんな事態に、職務上の尊厳と個人の羞恥心において耐えられないのは、被害者であるはずの土方だけだった。必死に銀時の罪を隠そうとする土方が、銀時には滑稽で仕方なかった。

悠々と大股で歩くように、緩慢に。銀時の指先が蟻の戸渡りを行進する。着流しの後ろの裾をいくらかたくし上げ、布地の張りをなくすと、指が進むのと同時に生地が尻の割れ目に食い込んで、形のいい尻の輪郭が露わになる。現在地の刺激と、情欲の証たる到達点に迫りつつある慄きで、下腹部がざわざわと粟立った。声を出さぬよう意識するあまり、歯並びのいい歯がガチガチと音を立てて噛み合わさる。

恐怖を煽るためにわざとゆっくり進む手が、獲物を捕らえる最後の一步をついに踏み出そうという、瞬間――。

土方は反射的に首を捻って、自分を陵辱する男の顔を縫い見た。悲壮なほど追い詰められ、くしゃりと歪んだ蒼白い顔を向けて、戦慄く瞳で許しを乞うた。

「……ああ」

致命的な斬撃を食らう間際のように。土方は全てを諦めるしかないことを悟って、絶望の呻きとともにきつく目をつぶった。

銀時の石榴色の瞳が、獲物を屠るのを楽しむような歪んだ嗜虐的な光をギラギラと放ち、自嘲的な皮肉な笑みを口に張り付かせていたからだ。

ああ。

こんな銀時、見たことない。

この男に、こんな顔は似合わない。似合わない…。

怒りなのか、悲しみなのか。

あるいは両方か。

いずれにしても、豹変の触媒が自分であることだけは、確か。

「へえ、こんなにおっ勃ててたんだあ。見られると感じちゃう性質だったんだね」

「…あつ、ひいッ」

形を確かめるように一撫でした後、銀時の掌は土方の半勃ちした証をきつく握り込んだ。ここまでの仕打ちから、怯える様子を楽し

みながらゆっくと蹂躪されるものと思っていた土方は、虚を突かれて声を殺し損ねた。隣で携帯をいじっていた若い女性が、ちらりと自分の顔に視線を遣わせたのを感じて、土方は生きた心地がしなかった。片手に掴んでいた黒靴の取っ手を、震える両手で正面に掴み直す。脂汗を流しながら声を噛み殺し、自ら靴を正面に持ちかえて銀時の淫行を隠蔽し、必死で何事もない風を装う。こんな惨めなことがあるだろうかと思いつつも、こんなことをされているのが不特定多数に発覚する惨めさを思うと、土方には選択肢がなかった。その事実が、ことさら土方を惨めにする。

保身という絶対的な鎖で自ら両手を黒靴に拘束し、今にも崩れ落ちそうな膝を叱咤して、何とか起立の状態を保つ。結果、四肢を拘束された無抵抗の獲物とかわらない。銀時は脈打つ証を手中におさめ、大胆な手つきで扱いた。裏筋を擦り、カリをねちねちと責め立てると、陰茎にどっと血液が流れ込んで官能が膨張する。

「……………ッ！」

無言のまま僅かに首を振って、この責め苦しさを耐え忍ぼうとしている土方を嘲笑うように、先走りの涙を零しはじめた尿道口に、布越しとはいえ爪が立てられた。

「ひあッ！」

痛みの中に、ズクンと響く気持ちよさを拾ってしまう自分の体が浅ましい。

しまったと思った時には、周囲から不審の目つきが突き刺さる。

「…あ」

どうしたらいいのかわからず、なすすべなく顔を強ばらせた土方に、銀時が白々しい言葉をかける。

「多串くーん、どうしたの？ 具合悪い？ 肩かそうか？」

こんな目に遭わせている張本人とは思えないほど、屈託のない頼もしい笑顔で銀時が言った。その演技は完璧で、周囲の目には友人思いな親切な男に映ったろう。忌々しく思いつつも、またしても土方に選ぶ権利はなかった。土方が選べないのではない。銀時が先回りして全ての逃げ道を塞ぎ、彼の意に添う一本の道を進むことしか許さないのだ。

「…わ、悪い。ありがとう」

土方はごちないながらも礼を言い、ふらつく足で回れ右をする。俯きながら銀時の肩を正面から掴んだ。先程の喘ぎ声を誤魔化すためにも、これ以上周囲に不審に思われたいためにも、陵辱者を盾に顔を隠すしかなかったのだ。銀時の痴漢行為も恐ろしかったが、痴漢行為をされていることが——こんなことをされて感じてしまっていることが——周囲にばれることの方が余程恐ろしかった。『多串君』と偽名で呼んでくれたことを考えれば、銀時の誘導に服従していれば正体は明かさないと暗に言っているのだろう。無論、逆らえば…。

土方が具合悪そうに銀時にもたれかかったことで、周囲の関心は

あっさり消え失せて、都会の人ごみらしい無関心が再び広がっていく。

人の悪い冷徹な声が、ぼそぼそと耳穴に直接吹きつける。  
「ききわけがいいじゃねえか。ご褒美にこれでもやるよ」  
「？」

土方と自身の体で死角を作りながら、俯いている土方の鼻先にタオル地のハンカチをつきつけた。

「着物の正面って、どうしてこんなにイタズラしやすいんだろうね。乳首も尻もナニも直接弄ってやる。さあて、何回イカせてやるのかな。ほら、口ひらけよ。これは純然たる好意だけ」

「…ああ」

何度目かの絶望が、声となって口から漏れた。土方が躊躇していると、銀時の指が襟の中に滑り込んできた。下半身を弄られてすっかり尖らせてしまった乳首を、宣言通り鬨るつもりだろう。

「…ああ、…待って」

蚊の泣くような声でそう言うと、土方は俯いたまま口を大きく広げた。銀時には土方の顔など見えていないだろうに、土方が口を開くと同時に乱暴にハンカチが口腔に詰め込まれた。乾いた布地に唾液が吸われ、口の中が乾く。舌にあたるざらざらとした布地の感触が不快なのに、吐き出すことは出来ない。これからされることは、自力では声を殺せないだろうから。

(…あうっ、嫌だ、もうやめてくれ！)

銀時は胸の突起をコロコロと転がしながら、帯下の着流しの合わせ目から逆の手を忍ばせ、パンツをゆっくりとずり下げた。

(うう…、こんなに人がいるところで、こんなこと…)

銀時の辱めは容赦がなかった。パンツが下がっていくのに比例して、血の気が引いていく。

(…ひあっ！)

パンツを脱がされると、その中で窮屈にしていた完勃ちの証が、ぶるんと身を震わせて飛び出した。

しかし、銀時の掌は性器には目もくれず、尻穴へと伸びていった。

ついさっき解された蕾の入り口は、歓喜したようにちゅっちゅと銀時の指に接吻する。生理的なその現象を意志の力ではねとばし、侵入させぬよう尻穴を窄めてささやかな抵抗をすると、

「濡れてないから、力抜かないと辛いよ。ま、俺はかまわないけど」  
(ぐうう…っ、いあっ)

括約筋をこじ開けて、銀時の指が尻穴に無理やり侵入した。本来は排泄器官でしかない場所を、他人に囲まれた中で犯されて、土方は羞恥でパニックになってきた。煽るように、銀時が残酷な命令を下す。

「次の駅につく前に、この人混みの中で尻だけでイケ。イカなかったら帯を解いて、後ろ手に縛って放り出すぞ」

(いやああああ！)